

馬車挽きたちも人間だから、生来気の強いのも
いれば弱気な男もいる。あるとき、こうした気の
弱い男の一人が、気の強い運転手のトラックと
出会った。狭いところだったのでこれまでの慣例
からいえばトラックがバックするのが時間のムダ
が少なくて済むのだが、しばらく双方で押し問答
したあげく、トラックは馬の鼻っ先へエンジンを
突っこんでいった。馬はエンジンの音を嫌って大
あわてに後ろへさがった。御者が自分からバック
させるときは速度と車輪の向きを計算してあるか
ら

トラックの運転手は長嘆息して、そのまま行っ
てしまった。
この話はまたたく間に馬車挽き仲間にも広まっ
た。

「その腹立たしい人、私がどういってお見舞い
を返す結果になりますか、みなさん見ていて下さ
い。」
この話にいちばん怒ったのは、いうまでもなく
シゲだった。

そして、ついにシゲとそのトラックが出会っ
宿命の日が来た。場所はもちろん大川の青々とし

ら無事だが、このときはあれよあれよという間に
馬車の後輪が山側の深いミゾの中に落ちた。おか
げで川の側にトラックが通れるだけの空間が生
じ、トラックは通過できた。このままで済ませば
いいのに、トラックの運転手はわざわざ降りて、
馬車を引き上げるのを手伝う名目でロープをかけ、
後ろへ引っぱったものだ。馬は驚いてあばれるや
ら、いなくやら、そのうち前輪までミゾに引き
ずりこむ結果になった。

「こうなつては、もう上がらないでありましょ
う
た深っ淵が下にひかえる狭い崖道。シゲはトラッ
クがやってくるのを見ると、とうていすれ違えな
い狭いところまで馬車を追いこんだ。そのやり方
はトラックの方からも見えたに相違ない。鼻を突
き合わせるなり、運転手の方はすでにけんか腰だ
った。

「お前さん、気の利いたことをなさってくれたも
のでありますね」

運転手は他国者らしく、耳なれぬ発音でこうし
た意味のことを叫んだ。

シゲは馬車の前部にすわりこんで、悠々と煙管

をとり出した。一服の構えである。運転手は逆上して、なおも何か大声に怒鳴り散らした。そして、それに取り合わないシゲに業を煮やして運転席からおりてきた。

口論の争点はどちらが待避点まで下がるかという単純なことで、双方とも理路整然としていたが、こんなときに理屈に勝つということが何の解決にもならないことはよく知られているところだ。

当然ふたりは撲りあい掴みあう立ち回りになった。

けんかにかけてはシゲの方がうまかったので、

しい馬車を買うことができなかつたからである。

荷馬車運送の消えていく時代がようやく目前に迫っていた。

秋祭りには、産土神社の境内で恒例の素人相撲大会が催される。出場者はすべて近郷近在からの若者たちだが、時として大相撲の幕下あたりが勧進元に連れられて顔を見せることもあった。

勧進元といっしょに境内をうろつく中にはシゲの姿もあった。だからシゲが勧進元から何かの利益を得ていることが想像されるのだが、それがどう

優劣はすぐ明確化した。ところがシゲにとつて不幸なことに、トラックが三、四台続いてきてしまったのだ。トラックと馬車のスピードの差を考えれば、しごく当たりまえの結果だったが、とにかくシゲは不運だった。ふくろ叩きにあったのはまだいい。シゲの馬車は、彼自身が念入りに選んだ大川の青い淵へ押し落とされてしまったのである。

シゲが馬車挽きをやめたのは、このけんかに負けて面目を失ったからであるが、経済的には新

いう理由の金か、どれくらい額か。相撲大会は毎年のことながら勧進元は毎年くるものじやなし、やっぱりシゲの暮らし向きことは花ノ根の七不思議の中にはいるのである。

花ノ根の溪流の中央部に橋があることはすでに述べた。その橋の北西のたもとに、木戸ゆいのお店があることもすでに紹介した。

源流から大川にそそぐまで一里半もある谷川に、なぜ一本しか橋がないのか。

カミノヒガシとイリの間は上流だから、大水

のときのほかは、瀬を嘔む岩づたいにでも谷川を越えて行き来できる、ということは考えられる。しかし、橋から下流、つまりシモノナガレとシモノカミの間に橋がないのは不合理なのである。なししろ、この二つの地区を合わせて百四十戸近い家があり、その戸数はまさに花ノ根の三分の二を占め、しかも発言力を持った旦那がたがこの両地区にたくさんいるのである。花ノ根の住人たちはこのことを全く問題にしていけないが、客観的にみれば、これこそ花ノ根七不思議の一つ

がいくらでもあるのだ。底を割ってしまったば何でもないようだが、寒の節句など、谷川の徒歩渡りは決して快い温度ではない。秋の終わりから冬にかけて長老会議で橋のことが話題にのぼることがあるのも当然だった。こうした話し合いのおり、元村長の三野庄平は予算難を理由に反対する。もし予算があれば、畑ノ壘とシモノカミをつなぐ大川の橋を全部コンクリートにするのが先決だというのだ。他の者には返せることばがない。村議会議員の多山健吾、小原恵

に数えられるべきであろう。

ナガレに三野庄平という名士がいる。長老の家筋で、かつて花ノ根村の村長をつとめたこともあり、現在もオピニオンリーダーとしては随一の力を持っている。

庄平の家屋敷は花ノ根を縦断する谷川を見おろす位置にある。その庭先に立つと、溪流もこのあたりまでくればかなり浅く、ハヤがどのあたりにもどくらい群れているかも一望で見渡せる。早

くいえば、つまり、橋などなくても渡れるところ

吉といったこの花ノ根の代表すら、黙りこくってしまうのである。元村長ではあっても現在の村政に参画していない庄平が予算難など口にするのは、はなっからおかしいのだが、元村長の言はそれほどにも重みを持っていた。

シモノカミから畑ノ壘へ渡る大川のカミの橋は、まず木造で、途中からコンクリート製に変わる。川の中ほどを境いに、木の橋とコンクリートの橋がつながっている恰好だ。花ノ根、畑ノ壘、カワラ木といった村々がまだ統合する前に造られたとき、

カワラ木とシモノナガレは多額を出して全部コンクリートの大川シモの橋を架けた。

畑ノ墾も多額を出してコンクリートの橋を建設したが、花ノ根のシモノカミは少額しか出せずに木造の橋で継いだ。水域はカーブの關係で常に畑ノ墾の側にあつたから、花ノ根側は木造でもよかつた。

この大川カミの橋，普段は通行に不便なかつたが、いったん大水になると、花ノ根側はまたたく間に水没する。そしてゴミを引っかけ、材木に突き当ら切り出し、使つた人間に対して特別に日当を払つたといふことも聞かないからである。

谷川にかける橋の話が出て、多山健吾村議があえて口出ししないのは、カミの橋の件に後ろめたさがあるからでもあろう。

ところで、三野庄平の屋敷の厠は、母屋に比較してすこぶる見劣りがする造りだ。雨こそ漏るまゝいが、しやがんだまま谷川の浅瀬が見られる。格好の高さに穴があいているのだ。庄平はこの厠を母家うちにある雪隠よりも愛用している。明るく

たられして、ついには流失してしまふ。大水の出るたびに流失してしまふ橋を、大水の終わるたびに架けなおすのだ。一度コンクリート製にすれば、こうした何回もの無駄はしなくて済むものを、この村では毎回木造橋しか建造しない。

この橋を造る仕事は多山健吾の請け負いである。健吾は滝の仁作ら自分の雇つている杓夫や使用人を総動員して橋をかけ、請求書を村当局に出す。この架設工事で毎年健吾がどれほど収入を得ているのか、誰にもわからない。資材は自分の山か

て気分が広々とするという理由だが、実はこの厠から浅瀬を徒渉する娘や女房の姿が見られるのである。もちろん俗謡の「浅い川」ほど風情はないにしても、様式化されていないナマな色気がある。七十歳近い庄平にして、なお好き者らしい精気を失わない秘密は、存外このあたりにあるのではあるまいか。

よろず屋の木戸ゆいをカミの女傑とすれば、シモノナガレの女丈夫は中村ソノである。ゆいは子なしだが、ソノには二人の娘がある。姉娘は

二十一歳で理容師、妹娘は十九歳の美容師だ。
ソノの母親も髪結いだったが、先年他界した。ソ
ノもその母親も亭主に先だたれた。いわば中村の
家は女系家族である。

普通の家に若い娘がいても男が用もなく遊び
にくることはなまなかに許されないが、ソノの家
は床屋である。大つぴらに出入りできるため客が
絶えない。若者の中には姉妹を隣り町へ映画に誘
う者もある。すると母娘三人で招待に応じて出か
けていく。

(以上7月16日放送分)